「我身にたどる姫君」構想試論

国文学科三十一回生十六号　黒田眞理子

目次

序
本論
第一章　系譜と人物造型
第一節　関白家系
第二節　皇后腹系・中宮腹系
第二章　各人物設定と構想
第一節　我身姫の位置付け
第二節　女帝について
第三節　前斎宮をめぐって
第四節　新帝と一品の宮をめぐって
結び

序

『源氏物語』成立以後、宮廷社会を舞台とした物語が多く出現した。しかしそれらは、量のうえでも物語の展開においても『源氏物語』を凌いではいない。特に中世になると、虚構の情緒に溺れた王朝栄華の追想から、創造力の乏しい擬古物語が数多く生まれている。日常の生活のどんな局面にでもすぐに古典を回顧したこの当時、物語が古典を踏襲したのも当然すぎることかもしれない。『我身にたどる姫君』もこの部類に含まれる作品である。

この物語の作者は未詳で、成立年代も不明であり、他の物語の研究に比べてかなり遅れをとっているのが現状である。

『無名草子』に「何事も、物まねびは必ずもとに劣るわざ」と論じられているように、この物語も『源氏物語』の影響を抜け切っていない部分もありこの非難を受けるにちがいない。ここでは、叙情も余韻もすでに枯れ果て、心境描写も情景描写も荒く、あたかも年代記のような感を与えるこの物語の底流である系譜と人物造型について考察し、その上で新境地を狙ったと思われるものとして、巻五、巻六、巻七の主人公を取りあげ構想面から吟味していくことにする。

尚、テキストには、現段階では唯一の本文と注釈がなさ

れている『我身にたどる姫君物語全註解』徳満澄雄著（有精堂）を使用した。

本　論

第一章　系譜と人物造型

主なる三系について系譜を追ってみると、どの家系も前世代の人物像を踏襲しており類型的な人物造型がなされていると指摘できる。さらに三系に二の宮系が介在して血脈的融合が完成され、ここで第一世代から続いてきた公然・非公然の恋愛模様が一段落するのである。もちろんこれには物語を予定調和の方向に推進させるための誘因として、密通に関しての罪意識の軽減や宿命的観念が大きく働きかけていることは言うまでもない。

鎌倉期の物語の特徴の一つとして、物語作家の構想力不足によって物語が一貫した内容を持つことなく分裂して終わる傾向があり、年代や人物関係においても齟齬し破綻を示すものが少なくないことがあげられている。しかしこの作品では各登場人物の官位昇進や人物関係、また時間の経過をみても齟齬している点はほとんどないといっても差し支えないくらいである。作者はいわゆる「長い目」をもってしてこの作品を成し得たのではないだろうか。主なる三系の流れも第四世代における予定調和の方向に向かっていると言うことができ、まさしくここに作者の意図があるように思われる。つまりこの物語は家系の流れそのものを描いたものであり、この家系というものを浮き上がらせるために各人物は類型的で世代踏襲がなされた造型になっているのではないだろうか。作者の視点は常に個人に向けられているのではなくて家系の流れにあるのではないか。

さて、このような年代記的構想を支えるものとして、当時の仏教思想が作者の念頭にあったのではないかと思われる。この物語に出てくる「宿世」――前世からの因縁や宿命を意味している――の語数を拾ってみると左表のようになる。

巻	一	二	三	四	五	六	七	八	計
「宿世」の数	1	1	5	8	5	1	7	0	28

※『源氏物語』の「宿世」の総数117

この数字を『源氏物語』と比較する場合、それぞれの作者の持つ語彙量も考慮しなければならないが、この作品が『源氏物語』の約六分の一の規模という点を含めてみるとその総数においては『源氏物語』の約1.5倍の頻出度であり、数字の上からいえば宿世観が強く出ていると言うことができよう。さらに巻別にその数をみると、前半（巻三まで）が7であることに対して後半は21である。前半が約四年間の出来事を詳細に叙していることに対し後半は約二十余年間にわたる多数の人物の動静を短い文面に圧縮させており、ここにも物語の流れ、つまり家系の流れを「宿世」に還元させるような筆致が窺われるようである。なお巻八にはこの語が一回も使われていないが、これはさも自然に予定調和的に三系の融合がなされたように見せかけている作者の筆使いのうまさと受け取りたい。

以上のように、この物語の底流である系譜と人物造型について、作者がこの物語の主軸としているのは各家系の流れであり、そのため個々の人物はその流れに包含されてしまっているという点と、そのような背景として宿世観が介入しているということが言えるのではないだろうか。

第二章　各人物設定と構想

鎌倉期の頽廃した公家の生活から生まれた物語はしばしばグロテスクな場面を描き出し、恋態・怪奇を扱い、露骨な描写も少くないものが多い。この物語においても宿世観の介入した血脈の流れとはまた別に、こういう部類の世界も作者は創出している。思うにこの作者は常に物語を二つの観点から描こうとしているのではないだろうか。『源氏物語』の「宇治十帖」の世界の続編を思わせるような権中納言と二の宮、さらにその息の殿の左大将と宮の右大将の設定もさることながら、女帝とその異母妹の前斎宮との両極端な人物設定や、巻七では新帝と一品の宮の悲恋を描く一方で後涼殿と宮の右大将の密通や、意に反した藤壺殿の三の宮懐妊など対照的な内容を網羅しているのである。ここでは第四世代における血脈的融合とは直接的には関係がないが物語の進行の上で異彩を放っていると思われる女帝など以下の人物について考察してみたい。

第一節　我身姫の位置付け

この物語には、巻ごとに主人公の亜流的人物が甚だ多く存在していてくしくも主人公を支えているといった観が強い。しかし時間的な面から見てみると、我身姫についてはその出生から死までが点描されており、また巻六を除くすべての巻に登場していることからこの物語の中心人物と言えるのではないか。そこで我身姫に与えられた位置について考えてみることにする。

前半の巻一から巻三までは我身姫と同時代の人物に関する描写が多く、彼女も物語の第一線に位置付けられている。しかし物語の展開の上ではさほど際立った存在ではないようだ。個々の出来事の主役というよりも前半部を包みこむ漠然とした位置が与えられていると言えよう。巻四以後は各出来事の背景に見え隠れする程度である。我身姫の登場する「場面」に注目してみると、その約半数が頗る不倫の匂いが強い各恋愛譚に関係していることに気がつく。権中納言と女三の宮、後涼殿と宮の右大将などがそれである。特に巻七の新帝と一品の宮との悲愛には、宮の母親という立場もさることながら、一面、不倫の愛の傍観者というシリーズの極まった形を見い出すことができるのではないか。それぞれの密通関係が表面化するにつれて読者に、あの一世代目の関白と皇后の宮の関係を呼び起こさせるべき手段として我身姫の存在があるように思われる。

我身姫の人物紹介的描写の中で特に巻四では「我身にたどるとかや初めより思し乱れし御上なめる」、さらに巻八の我身姫崩御のところでは「我身にたどるとかや初めより聞こえたまひし御上よ」となっている。これらは巻一の

「我が身にたどる契りなりけん」の歌を踏まえての描写である。機会あるごとに作者は我身姫の立場を物語の発端に返って再確認しているわけで、やはりここにも水尾帝皇后の宮と関白との関係が尾を引いていると言うことができよう。時の皇后の宮と関白との間の秘密の子としての運命を背負わされた我身姫は、その「我身にたどる」という言葉そのものが物語全体のシルエット的キーワードであり、多くの人々が登場してはいつともなく消え去るこの物語においてしぶとくその存在を保持し続けているのである。いわば「時の流れ」の主人公としての位置を我身姫に見て取ることができるのではないか。

物語はまず、音羽の尼上に養育されていた我身姫が「めづらかにきよらなる御さまにて、心ひとつに思ひ乱れたまふ」ところから始まっている。ある雪の日三位の中将に垣間見られ、さらに二の宮も我身姫に心を寄せ初めたことを知った実母・皇后の宮は心痛のあまり崩御してしまい、我身姫は実父・関白のもとに引き取られる。時のいたずらか春宮の御息所となり、中宮、皇太后女院を経てその一生を閉じている。我身姫自身には同母弟の二の宮から言い寄られたこと以外これといった事件はなく、二の宮との関係も皇后の宮が二の宮の夢に現れ、二人のことをそれとなく諭したことで決着がついている。最後も「皇太后の宮の御事の後、尽きせぬ御嘆きに弱らせたまひにしなり。」とあるように親に先立った一品の宮の死の延長線上に一生が終っており、自分自身よりも他の人物の行動の背景に生きた人物である。全体的にみて主体性がなく「宿世」に流されて生きるタイプの女性で、「足立たぬ蛭の子」的はかなさや侘びしさを雰囲気として持っており「王朝的あはれ」を感じとることができる人物のようだ。鎌倉期の乱れた宮廷社会の落胤であると同時に過ぎ去りしよき王朝時代に憧れ、思いを馳せる作者のよすがとしたのがこの我身姫ではなかったのだろうか。

第二節　女帝について

巻五には承香殿皇后の即位による女帝の治世が描かれている。史実上の女帝は奈良時代の称徳天皇以来長く絶えており、江戸時代の明正天皇に至って再現をみるもので、この女帝の設定は作者の独創と見るべきであろう。

女帝は皇后の宮の息・嵯峨院と関白の娘・嵯峨女院との間の姫君である。「姫宮ひとところぞ持たせたまへる」とあり両親の期待を一心に集めての登場で、まず嵯峨院は我身帝に入内を申し込む。しかし中宮（我身姫）以外の女性には戯れにも関心を示さない我身帝がこれを拒否したため春宮の后にしようと試みるが「関白殿の御あたりいかにも一方はあるべきさまなめれば、なみなみの更衣などだに参りぐるしうするに、まして氏の外の后は、女院いみじう御諫めあ」って前途多難である。しかし「ただいかでも限りあらん御位ひとつをわが世の末なくてやみぬる御哀びに」という嵯峨院のたっての希望が通じて春宮への入内の運びとなっている。三条帝の後宮には他に「藤壺に殿の女御、後涼殿に三条の女御、麗景殿に式部卿宮の女御」と錚錚た

るメンバーが揃っているので、帝の愛の対象というよりも次の帝位につくべき足掛り的趣きが強いようだ。

三条帝皇后の地位にある時は他の后との競争を避けて里がちであり「御手はた世に類なきまですぐれたまへる」と才学の面のみが強調されている。三条帝譲位の後帝位につくと「あやにくにつくろはせたまふこともなき御様・容貌をはじめ（中略）まことに言葉も及ぶまじくぞおはします」「もとよりけしからぬ底清き御さまの、人に似させたまはざりし」というように女帝讃嘆がなされており、政策面でも「みなの事はけざやかに隠れもなくのみもてつけたる用意、まことにきらぎらし」と理想的形態をとって「心なき草木」までも靡く治世である。これを巻ごとに見ると、

巻四。（三条帝皇后）帝の寵愛は薄い方で里がちである。
　。和歌の才能が強調されている。

巻五。（女帝）宮中の綱紀粛正に努め理想的政治を行っている。
　。三条院の寵愛が以前よりも深まる。
　。和歌に加えて音楽的才能も備えている。
　。仏教的教養も身につけている。（「御みづから書かせたまひし金泥の五部の大乗教」）

巻六。（女帝）才学が聖域に達している。（「いみじき明王にもたてまつれるかな」――民部卿の言）
　漢学的教養の付加（『群書治要』を読んでいる。）
　。人間性に幅が出ている。（扇をめぐる側近への心づかい。）
　。政治的収拾力がある。（前斎宮邸のとりまとめ）
　。三条院の影がない。――「帝」として一個の独立した形の確立

となっている。巻六は巻五の並びの巻であることもあり、巻五で完成された女帝像のさわりの部分をさらに発展させた描写といえよう。非の打ちどころのない人間――それが女帝なのである。前にも触れたが女帝は第一世代の皇后の宮の息・嵯峨院と関白の娘・嵯峨女院との間の姫君である。皇后の宮と関白は不倫な愛によって結ばれてしまったが、その子達は彼らの愛をまともな形で顕現したことになる。ここに皇后腹系と関白家系の不義によらない正統な接触があるわけで、女帝はその出生からして作者の理想とする人物たるにふさわしいと言えるのではないか。女帝の治世は第四世代の人々にとっても精神的支柱となっており、女帝は来たるべき三系の融合上潔癖すぎるぐらい美化された象徴と言うことができよう。

次に「天降れらん乙女の姿も及ぶまじう」という文を初めとして「かぐや姫」のイメージが常に女帝の存在と重なっていることも興味深い。以下関係箇所をあげてみる。

▽さらに天降れらん乙女の姿も及ぶまじう、つやつやとめでたき御髪のすそまで」　P290

▽「かけざりし禊の波に袖濡れて神代あやしき身の契りかな」（豊の御禊での三条院の歌に対する女帝の返歌）　P302

▽「色に出でん秋の涙のかひもあらじ月の都に契り絶えなば」　（三条院への行幸の場面での女帝の歌）　P352

▽例のこちたき御契りも、月の都のみぞ恐ろしう思しめされて　（三条院への行幸の場面）　P353

▽「おほかたのすみ果てぬ世のはかなさを月の都にたれかかこたん」　（三条院への行幸の場面での女帝の歌）　P353

▽五日の月のいとほそくかすかにて、御車にさしむかひたる心地するに「月の都」は、まづ思しめし出でられて　（三条院が故女帝を懐しむ場面）　P456

その他嵯峨院への行幸の折「昔の姫宮の御世思し出でて、御膝にも据ゑたてまつらまほしく」思っている父・嵯峨院や、離別の悲しみのあまり「つつみあへず御几帳押しやらせたまふ。女院の御類ひさらに隔てきこえさすべくやはとあまりの御心ざしには、軽軽しくもや聞こゆらん」と評されるような常態を逸した行動を取っている母・嵯峨女院の様は、女帝への愛情そのものであり、翁のかぐや姫に対する愛情と同類であると言うことができよう。

また女帝は死後兜率の内院で和歌の会を催していることになっているが、兜率の内院での歌会というのもかぐや姫の連想からいけばありうることである。さらに巻八で、生前養育していた今上帝が病に倒れ、祈禱やさまざまな薬も効を奏さなかった時、女帝が太皇太后と今上帝の夢に現れて今上帝の治世を予言し病を快癒させているが、この辺もかぐや姫の後日談的性格と呼べないこともないであろう。

これら一連のかぐや姫の連想は、女帝を一層神聖化すると同時に現実離れした存在へと走っている点は否めない。しかし女帝設定に窺える思想には注目すべきものがある。当時の宮廷社会をみると、例えば『とはずがたり』にみられるように、皇室においてもいわゆる倫理観の枠を越えた愛の遍歴が公然と行われていたようである。そのような中で第一に王政復古の思想がそれである。閉鎖的頽廃的な貴族社会を背景にしてこの物語の中で女帝の設定がなされたことは目を見張るべきものであり、壊れつつある宮廷社会の復興を女帝に託して夢見ている作者の姿が浮かんでくるようだ。この王政復古の思想はいわば厳しい現実批判の上に生まれたものだが、作者は天人女房譚の伝奇的ロマンチシズムをもって女帝を創出している。よって女帝は物語の中でのみ活躍する人物であり、社会的に発展性がないのが難点となっている観がある。次に注目すべき点として第二に結婚拒否の思想が窺えることである。兜率天での女帝の歌は、

「露霜の結ぶ契りをいさめ来し朝日の光り今日やはれぬる」　P445

「かりそめの水に宿りし日かげを惜しみ顔にも濡れし袖かな」　P445

とあり、三条帝との夫婦の仲も白紙に戻すべき状況である。この物語の中には多様な女性像が描き出されているが、そ

の中でこの女性こそ作者の理想とする人物だったのではないだろうか。頭脳明晰・容姿端麗、さらに夫に追随的ではなく一個の独立した存在――ここに理想的な女性の創出がなされているのである。

叙述において先蹤物語に執着しすぎたという問題があるにしろ、やはり構想から見ると女帝設定は擬古物語の新境地を狙ったものとして十分評価できると思う。

第三節　前斎宮をめぐって

嵯峨院には女帝の他に異腹の姫君があって斎宮として伊勢に下っていたが、女帝の御代になって上京した。この前斎宮をめぐっての譚が巻六の主部を占めている。巻六は構造上の問題や作者について、また他巻との成立年代に関しても多くの問題を含んでいるが、ここでは前斎宮の人物像そのものと全体の構想について考えてみたい。

作者が前斎宮という人物をこの巻六という物語の流れの上でも中軸と言える部分に設定していることは注目される。さらに巻三と巻四の間に約十七年間の空白の部分を置いて物語を進めている点と比べてみても、時間の重複を許してまで前斎宮という人物を描ききっているということは意味深長といったところである。

前斎宮の特徴としては、まず色情症的性格があげられる。中でも巻六の冒頭、宮の右大将が前斎宮邸を垣間見すると「さしもあるべくもあらず、ものあつれてなりゆく頃を、薄き衣をひきかづきたるうちに、かぎりもなく息もせざらんと見ゆるほどに、首を抱きてぞ臥したる。さるは何といふにか、うち泣き、はなかみなどもす。あはれにかなしきことやあらんと見るほどもなく、またたへがたげに笑ふ。心えず見たまふ。衣の下も静かならず、何とするにか、むつかしうものぐるほしげなるに、さまかはり、ゆかしきかたもまじれど、あやにくに心深くなれなれしき筋を好みたまはぬ人は、見だにもはてず出でたまひぬる」と異常な同性愛が繰り広げられており、さすがに右大将も帰ってしまう。「暑きに首も痛く、物などもいとやすらかにもえ食はず。御箸にてくくめなどせらるれば、やせたくわびしきに」と言うのは、小宰相が前斎宮に食べさせてもらっている様で、さらに新大夫の君を加えて「三人寝たらん」ということになっている。後には源中将が前斎宮の相手となるが「ひまなき檜隈川のまきかくるやう」な前斎宮の行為に源中将も閉口してしまう。「檜隈川」は巻四で関白が女四の宮にとり込められているところにも「檜の隈川にひきとどめられてありつる文も遅くなるを」と引かれており、「夜すがら日暮らしとり籠めて」解放しようとしない女四の宮と関白の様に一脈通じるものがある。ところで関白が女四の宮の激しい嫉妬に対して「こは物に狂はせたまふか」と問うと宮は「何事宣ふぞ」と否定している。この前斎宮にあっては関白の言がそのまま現実になって現れた形といえるだろう。

次に軽薄な面も特徴としてあげられる。小宰相のところへたった一人の身内である異母兄の兵衛佐から風流な壇紙・薄様などの入った手箱が届けられると、前斎宮は「主よりはまづさきに開けちらして、『あなをかしげの下絵や。薄

様の箔の置きやうのよさ』など、ててくらせたまふ。」ありさまである。また二人の兄妹仲を妬んで異母姉の女帝に手紙を出すが「さるはありつる兵衛佐の心ざしの薄様なりけり」と小宰相に贈られた薄様を使っており、そこに書かれている歌にも「海の原」、「雪間の草」と二つの歌が引かれている。尼上が家具を持ち去る時の応答でも「年頃も『入りぬる磯』にのみならはせたまへど『葦垣』にのみこそなぐさみはべるに心細くこそ」と「入りぬる磯」「葦垣」の引歌が用いられているがこれらは『源氏物語』の常夏の巻に登場する田舎育ちの近江の君に代表されるように教養のある人のすることではない。

さらに何か先天的な精神病質を思わせるような箇所も少なくない。同性愛の対象が中将の君から小宰相に移ると中将の君は「移ればかはる世の中を」と言いおいて荒く戸を閉めて行ってしまう。そこで小宰相は中将の君の嫉妬を哀れに思って出て行こうとすると「『君さへや捨てたまふべき』と手を引き寄せてしほしほ泣きかけたまひ、手の内に涙を泣きためて、尼君の御方よりありつる御くだものの土器に移し入れたまへば、ひと土器泣き入れつ」とかなりオーバーな表現がされている。しかしこの前斎宮に関してはあまり違和感を感じないから不思議である。また中将の君の嫉妬に拠る物の怪が強いと言って「おぢなげき、ともすれば声をたててひめかせたまふ。物の怪強きとて、南面の妻戸おし放ちて草の露しげき庭にふはりと臥しなどせさせたま」うあたりは、もはや常人の域を越えているといってよいだろう。前斎宮が発する語には同語反復が多いが、これも先天的な精神病質の傾向だと思われる。

だが前斎宮に託された人間像は狂人的面ばかりではないと思う。邸に落ちていた男持ちの扇を見つけてその持主をしつこく詮索したり「『新大、門をささせばや。また恥づかしき事もこそあれ。見よや』など仰せられど、つねよりも薫物などけぶらかして」今か今かと男の来訪を待っているあたりは異様といえば異様だが、斎宮という男子禁制の世界に年月を送った女性の描写としてはかなり現実的趣向が汲みとれる。御櫛笥殿の遺産相続をめぐって伯母大納言の尼上と大弐を筆頭とする口さがない女房の間で争いが起きるが、当の主役である前斎宮は尼上の好きなようにさせており、そこには世間知らずで気がいい前斎宮の姿が描かれている。そのような前斎宮が気になってか小宰相は邸を出て行った後もしばしば訪ねたり贈物をしたりしている。また少納言の君は衣服の新調を強引にねだる前斎宮から裁縫に追いたてられながらも「いたはしげに思ひきこえ」ている点からして、色情狂的てらいとは別に憐憫と同情をひき起こさせる要素が含まれているといってよいだろう。

今井源衛氏は、

その（前斎宮）人間像には、必ずしも頽廃とか奇矯の語を以て片附けきれないものを含んでいるように思う。

と述べておられる。[注1] 前斎宮は一見同性愛的嗜好や軽薄な言動のために物語から遊離した存在のように見受けられるが、その実は前斎宮なしでは描ききることのできない世界——

仰圧された鎌倉貴族の変質的個性の確立をリアリティに取りあげたものだと言えるのではないか。

さて巻六の後半には前斎宮邸の遺産紛争を解決した女帝の聡明談が続いており、一層神聖化された女帝と狂人的ではあるが現実味を帯びた前斎宮の対照性が明確に描き出されている。女帝と前斎宮という直接物語の進行とは関係していない人物の譚が物語の盛り上がりの部分に対をなして置かれ、特に前斎宮のような「王朝的あはれ」を真っ向から否定した人物の設定がなされている点は王朝文学からの脱出を試みたものと言えるのではないだろうか。

第四節　新帝と一品の宮をめぐって

新帝と一品の宮の宿命的悲恋の譚は、巻七の大部分を占めており、およそこの物語のあいまいな密通を主とする他の恋愛譚とは趣を異にしている。二人の愛の要因には、血縁的危険性と同時に破局へと導くべき恋愛に対する未熟さが潜んでいるように思われる。この悲恋は「二人の死」という形で決着がつき、誠にあっけない幕切れを迎えている。しかしそれがかえって迫真性を帯び物語の終盤を強く印象づけているのである。新帝と一品の宮の悲恋の意義付けは、まだこれといってされていないが系譜と作者の恋愛観からこれを考えてみたい。

『我身にたどる姫君』の恋愛譚の主軸は「密通」である。新帝と一品の宮にもこの言葉は通用すると思う。しかし他の密通事件とは異なる点がある。まず人物からして他の譚は皇室内部者とこれ以外の関係人物だったが、ここは二人とも皇室内部の人物である。さらに密通の結果をみると他の譚は露見せずに、あるいは第四世代のその関係者のように、露見の余地があってもうまいぐあいに取りまとめられているが、ここでは『狭衣物語』の女二の宮をひきあいに出しながらの予想外な二人の死という形である。この二点からして、作者はこの密通を一番罪の重いものとして設定しているのではないだろうか。第一世代目の皇后の宮と関白を皮切りに、密通が惰性的に行われてきたが、けして作者はそれらをあるべき体とはしていない。はにかみながらも「宿世」の一語に凝縮させているようだ。密通による各登場人物の血脈的融合は、物語の展開のうえで不可欠なものではあるが、そのような淫らな恋愛関係に一矢報いてやりたいという作者の気持をこの悲恋に見てとることはできないだろうか。巻八での各系の融合を前にして、その融合とは直接関係していない二人に作者が今まで黙認し続けてきた密通を一つの区切りとして精算させようとしたのではなかったのだろうか。

結　び

先行文学からの脱出を試みたものとしては女帝と前斎宮の設定ぐらいであるが、王朝文学からの引歌や語句の引用、さらにプロットやモチーフの借用といった、いわば作者の教養が窺えるような筆致にはたいへん興味を覚える。特に引歌はこの作品を正確に理解する上で重要である。それはまさしく古典の踏襲の粋にはまった擬古的な要素ではある

が、それを感じさせない独自な世界も形成されているのである。

全体的にみて人間洞察に徹しきった作者像が浮かびあがってくるが、ユニークな表現や古典のパロディも随所にみられるようにけして片意地な人物ではないようだ。今のところ作者は未詳である。今後この点についても研究が深まることを期待したい。

注1・「我身にたどる姫君」のユーモア――「語文研究」第五十二・五十三号